

## まえがき

本書は、2012（平成24）年度文化庁委託事業「東日本大震災において危機的状況が危惧される方言の実態に関する調査研究事業（宮城県）」の報告書です。

東日本大震災における被災地の方言の現状や問題点については、すでに、昨年度の報告書『東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する予備調査研究』に記しました。今年度は、それを引き継ぎ、特に宮城県を中心とした被災地において、地域の方々の方言意識を調査し、方言の記録を開始しました。また、それらの方言に関するさまざまな情報を発信し、今後の活動のための基盤を整備することも行いました。

この報告書をまとめるにあたっては、被災地の住民の方々や教育委員会をはじめとした自治体の方々、また、支援者の方々にたいへんお世話になりました。いまだ不便な生活が続く中で、私たちの活動に理解を示してくださり、ご協力くださったみなさまに心からお礼申し上げます。

また、今年度は昨年度と異なり、その活動の範囲は宮城県のみでなく、青森県、岩手県、福島県、茨城県にも広がりました。それらの地域の研究者たちと共同でこの事業に取り組めたことはたいへん心強く、また励みになりました。

この事業の最終的な報告会を仙台と東京で開きますが、そのタイトルを、

「文化としての方言・絆としての方言

－東日本大震災、被災地からの発信－

と付けました。また、ポスターにはその趣旨について、次のように記しました。

方言はふるさとの文化である。人々をつなぐ絆でもある。今、その方言が、被災地復興のための重要なキーワードになっている。

私たちのこの取り組みが、震災の困難の中にある“ふるさと”の再生に寄与できることを願っています。また、この報告書が多くの方々の目にとまり、被災地の方言の将来について考えるひとつのきっかけとなることを期待します。

2013年3月8日

東北大学大学院文学研究科・  
東北大学方言研究センター教授

小林 隆

東北大学方言研究センター  
2012（平成 24）年度文化庁委託事業  
「東日本大震災において危機的状況が危惧される方言の  
実態に関する調査研究事業（宮城県）」報告書

## 目 次

まえがき

1. 事業の概要.....	5
2. 支援者、自治体職員、被災者の方言意識について.....	7
2. 1. 調査の目的.....	7
2. 2. 調査の概要.....	7
2. 3. 調査結果.....	8
2. 4. まとめと提言.....	21
3. Webサイト「東日本大震災と方言ネット」の運用.....	23
3. 1. 東日本大震災と方言ネット構築の背景.....	23
3. 2. 方言ネットの目的.....	23
3. 3. 東日本大震災と方言ネットのコンテンツ.....	24
3. 4. 方言ネットの利用状況.....	29
3. 5. 方言ネットの成果と今後の課題.....	33
4. 被災地方言についての研究文献目録の作成と公開.....	35
4. 1. 目録作成の目的.....	35
4. 2. 目録の作成にあたって.....	35
4. 3. 目録の公開.....	36
『被災地方言研究文献目録』.....	37
5. 『伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集』の作成と公開...	135
5. 1. 『伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集』とは...	135
5. 2. この会話集の考え方.....	135
5. 3. 収録調査の方法.....	138
5. 4. 資料作成の方法.....	141
5. 5. Web方言会話集.....	145
5. 6. 今後の課題.....	149

『被災地方言会話集』 .....	153
気仙沼市.....	155
本吉郡南三陸町.....	201
石巻市.....	249
牡鹿郡女川町.....	295
東松島市.....	347
宮城郡松島町.....	387
宮城郡利府町.....	427
塩竈市.....	483
宮城郡七ヶ浜町.....	533
多賀城市.....	575
仙台市.....	615
名取市.....	653
岩沼市.....	695
亶理郡亶理町.....	743
亶理郡山元町.....	791



# 1. 事業の概要

この取り組みは、2012（平成 24）年度文化庁委託事業「東日本大震災において危機的状況が危惧される方言の実態に関する調査研究事業（宮城県）」として行ったものである。

## 1. 1. 経緯と目的

東日本大震災における被災地域の方言の現状や問題点については、2011（平成 23）年度文化庁委託事業報告書『東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する予備調査研究』（東北大学方言研究センター）に報告した。

これを受けて、本事業においては宮城県を中心とした被災地域において、人々の方言意識を調査し、方言の記録を開始するとともに、被災地域の方言に関する様々な情報を発信し、今後の活動のための基盤整備を行うことを目的とした。

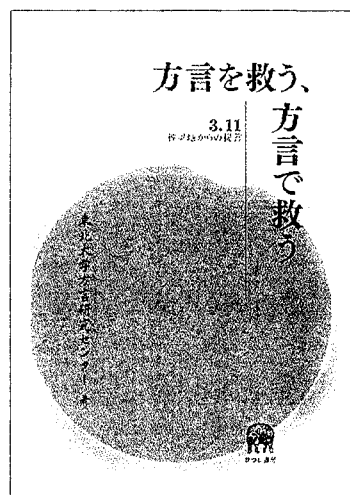
## 1. 2. 事業の内容

- (1) 被災地域における方言の状況に関する調査及びその分析  
⇒小林隆ほか（2012）「東日本大震災と被災地の方言—東北大学方言研究センターの取り組み—」  
雑誌『日本語学』「特集災害とことば」への寄稿  
⇒東北大学方言研究センター（2012）『方言を救う、方言で救う—3.11 被災地からの提言』（ひつじ書房）の刊行

- (2) 被災地域における方言話者や地域住民、自治体職員等に対する意識調査及びその分析  
⇒ 支援者、自治体職員、被災者の方言意識についての調査の実施

- (3) 消滅の危機に瀕していると考えられる方言の音声、映像を含めた資料の収集及び整理・分析  
⇒ 『伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集—宮城県沿岸 15 市町』の作成・公開

- (4) 被災地域における消滅の危機に瀕していると考えられる方言の現状把握のために必要な調査、データの作成及び方言の現状把握や保存継承に資するネットワークの構築  
⇒ 『被災地方言研究文献目録』の作成・公開  
⇒ 「東日本大震災と方言ネット」の構築と運用



## (5) 調査研究結果に関する説明会等の実施

「震災の中で方言研究者ができること、なすべきこと」他ポスター発表4件  
(2012年5月18日 日本方言研究会第94回研究発表会 千葉大学)

「言葉」で「つなぐ」  
(2012年8月17日 日本語教育国際研究大会特別企画  
「みんなのまちづくり—震災のあと行ってきたこと、これから行っていくこと」  
『関連事例集 わたしたちのまちづくり』 名古屋大学)

「つなぐ言葉としての方言—被災者・支援者・そして研究者—」  
(2012年9月1日 第30回社会言語科学会研究大会ワークショップ 東北大学)

「東日本大震災と方言に関する研究報告会—文化庁委託事業の進行状況—」  
(2012年11月3日 文化庁委託事業研究報告会 富山市民プラザ)

「文化としての方言・絆としての方言—東日本大震災、被災地からの発信—」  
(2013年3月9日 文化庁委託事業研究報告会 仙台会場：仙台国際センター  
2013年3月19日 同上 東京会場：一橋講堂<学術総合センター>)

### 1. 3. 実施体制

代表者：小林隆（東北大学大学院文学研究科教授）

分担者：武田拓（仙台高等専門学校准教授）、櫛引祐希子（追手門学院大学講師）

幹事：中西太郎、田附敏尚、川越めぐみ（以上、東北大学産学官連携研究員）

協力者：椎名渉子、内間早俊、津田智史、魏ふく子、坂喜美佳、崔柳美、石山理恵、  
小原雄次郎、佐藤亜実、袁曉犇、王卓、黄川川、蕭舒文、林芸溱、冷吟、  
(以上、東北大学大学院文学研究科大学院生)、伊藤友香、刈間勇斗、柴田充、  
福井幸、町田隆弘、三沢由季子（以上、東北大学文学部学生）

### 1. 4. 協力機関等

気仙沼市教育委員会生涯学習課、南三陸町教育委員会生涯学習課、法音寺（石巻市）、  
松巖寺（石巻市）、グランド・グレイス・プロジェクト、女川町教育委員会生涯学習課、  
東松島市教育委員会生涯学習課、東松島市コミュニティセンター、松島町教育委員会  
生涯学習班、利府町教育委員会生涯学習課、塩竈市教育委員会生涯学習課、塩竈市社  
会福祉協議会地域福祉課、多賀城市教育委員会事務局文化財課、七ヶ浜国際村国際交  
流係、仙台市若林区区民部まちづくり推進課、仙台市七郷市民センター、名取市方言  
を語り残そう会、岩沼市教育委員会生涯学習課市史編纂室、亶理町教育委員会生涯学  
習課、山元町教育委員会生涯学習課

## 2. 支援者、自治体職員、被災者の方言意識について

### 2. 1. 調査の目的

東日本大震災直後と比較すると、被災地に求められる支援の内容は、質・量ともに震災直後とは大分変ってきた。例えば、求められる震災ボランティアの量は、震災後初期段階に比べ、相対的に減ってきていると言われる。では、そういった量の減少に伴い、被災地でのコミュニケーションに関わる問題の重要性も低くなっているかと言えば、単純にそうだとは言えないように思われる。その理由は、求められる支援活動の内容の変化に関わっている。

社会福祉協議会の告知しているボランティア募集状況（2012年9月7日：<http://www.saigaivc.com/>）によれば、現在、被災地で求められるボランティア活動は、被災者の生活支援（買物支援、調理支援、（仮設住宅などの）環境整備）、安否確認、孤立防止などの活動が中心となっている、とある。さらに、続く記述には「これらの活動には、被災者とのコミュニケーション、人間関係づくりが必要となる」と明記している。つまり、現地で、被災された方に寄り添う活動が中心となり、コミュニケーションを取る活動の比重が高まっていると考えられるのである。そこでまず、支援者と被災された方との、方言に関わるコミュニケーションの問題を把握するべく調査を行う。調査の目的は、以下の2点である。

- ・被災地各地での方言にまつわるコミュニケーションの問題を把握する。
- ・支援者のコミュニケーション環境や、被災地方言への言語意識などを把握する。

（以上の文章は東北大学産学連携研究員中西太郎作成の文書を基にした）

### 2. 2. 調査の概要

原則として、現地での面接調査で、時間は30分程度。調査票は「支援者用」「自治体職員用」「被災者用」の3種類を用意したが、状況に応じ調査項目を取捨選択している。調査は2012年12月から2013年2月にかけて実施した。なお、調査項目の選定、調査票の作成は主として東北大学産学連携研究員中西太郎、福島大学半沢康があたった。また、調査には武田のほか、東北大学大学院文学研究科小林隆、東北大学大学院生内間早俊があたった。また、武田の調査にあたっては、前出の中西太郎のほか、同じく東北大学産学連携研究員の川越めぐみ、田附敏尚氏の協力を得た。

調査にご協力いただいた話者の属性等は以下の通り。

- A氏（気仙沼市・支援者・20代・男性 千葉県八千代市から）
- B氏（気仙沼市・支援者・30代・男性 佐賀県鳥栖市から）
- C氏（気仙沼市・自治体職員・30代・男性 地元出身）
- D氏（気仙沼市・自治体職員・50代・男性 地元出身）

- E氏（気仙沼市・被災者・20代・女性 地元出身）  
 F氏（気仙沼市・被災者・50代・女性 地元出身）  
 G氏（気仙沼市・被災者・70代・女性 地元出身）  
 H氏（本吉郡南三陸町・支援者・40代・男性 宮城県仙台市から 岩手県釜石市出身）  
 I氏（本吉郡南三陸町・自治体職員・60代・男性 地元出身）  
 J氏（石巻市・自治体職員・60代・男性 地元出身）  
 K氏（岩沼市・自治体職員・30代・男性 神奈川県出身）  
 L氏（亶理郡亶理町・自治体職員・50代・男性 地元出身）  
 M氏（亶理郡山元町・被災者・70代・男性 地元出身）

## 2. 3. 調査結果

「支援者」「自治体職員」「被災者」の順に、質問項目（◎で示す）と質問の際の留意点（※で示す）、それに対する回答（→で示す）を列挙する。

### 2. 3. 1. 支援者

#### ◎支援活動の内容とコミュニケーション状況

※方言で人と接する機会があるか/被災地の方と会話する機会はあるか/どちらの方と（どこで）話したか/方言をどれくらい使用していたか/どのような人だったか（年齢・性別など）/どのような状況で話したか/方言の通訳がいたか

- 市役所の職員の方とはある。あと、千厩（せんまや）の仮設住宅に居住しているので、そちらの住宅の方々とも。（気仙沼市・支援者・20代・男性 千葉県八千代市から）  
 →被災地の職員、高齢被災者と避難所で話すことが多かった。出身地の方言とあまり変わらないので、出身地で話すように話していた。（本吉郡南三陸町・支援者・40代・男性 宮城県仙台市から 岩手県釜石市出身）

#### ◎被災者との間に方言摩擦があったか。

※被災地の方言について、困った（わからなかった、戸惑った、驚いた）経験がないか/具体的なことば・言語行動の特徴として、どのようなものがあつたか

- こちらの方言は、最初は理解できるのではないかと思ったが、実際話してみると、年配の方々の言葉はあまりわからない。方言色が強く感じられる。（気仙沼市・支援者・20代・男性 千葉県八千代市から）  
 →私は、それはそれでいいなあと思う。千葉はそれほど訛りはない。逆に、こちらのように特色があることがうらやましい。魅力を感じる。（気仙沼市・支援者・20代・男性 千葉県八千代市から）  
 →わからなかった言葉としては、たとえば、ナゲル、オダズ、チョスなどといった言葉。最初意味がわからなかった。（気仙沼市・支援者・20代・男性 千葉県八千代市から）



→全体に聞きづらい。何を話しているのかわからない。発音とか単語。「ウジホ（自分たちの方）」という言い方がわからなかった。ナゲルもよく耳にする。（気仙沼市・支援者・30代・男性 佐賀県鳥栖市から）

→あまり違和感はなかった。高齢者の方言で、ときどきわからないものがあった。若い人のことばは全部わかった。被災者と支援者との間で摩擦があったとは聞いていないが、聞き返していいものか、繰り返し聞き返しても分からない、と支援者は苦労していた。大阪、兵庫等、遠くからの支援者が多かった。（本吉郡南三陸町・支援者・40代・男性 宮城県仙台市から 岩手県釜石市出身）

◎被災者とのあいだに方言摩擦があったとき、どう対応したか。

※聞き返す/聞き流す/通訳を頼む/話をやめる

→聞き流す。市民課業務なので言葉がわからないことはたいへんだ。（気仙沼市・支援者・30代・男性 佐賀県鳥栖市から）

→わからないときは、前後関係で判断。聞き返すことはしない。自分は仙台の言葉に慣れてしまったので、ここの言葉は荒い感じがした。遠くから来た人は困っていたようだ。（本吉郡南三陸町・支援者・40代・男性 宮城県仙台市から 岩手県釜石市出身）

◎方言以外の話し方の違いを感じるか。被災地方言は難しいか。

→何を言っているか全くわからないということはまだない。（気仙沼市・支援者・20代・男性 千葉県八千代市から）

→そう感じる。（気仙沼市・支援者・30代・男性 佐賀県鳥栖市から）

◎被災地の方に使ってもらいたいことばは何か。

→言葉は使う人の自由だが、方言はなくなってほしくない。方言には魅力がある。（気仙沼市・支援者・20代・男性 千葉県八千代市から）

→本来、私の方が地元の人に合わせないといけないと思う。（気仙沼市・支援者・30代・男性 佐賀県鳥栖市から）

◎支援者自身の方言使用について気を付けたか。

→佐賀では方言を交えて市民と会話していた。その癖がつい出てしまう。（気仙沼市・支援者・30代・男性 佐賀県鳥栖市から）

→相手に伝わらなさそうな方言を使うことは避けたが、無理に共通語を話そうとはしなかった。（本吉郡南三陸町・支援者・40代・男性 宮城県仙台市から 岩手県釜石市出身）

◎方言の問題への今後の対応について

※方言摩擦などを踏まえてどうすべきか/今後も支援活動が続けるか/今後、被災地の

方言を学びたいか/今後、他地域での災害発生時、支援者として、被災地の方言を学んでから行きたいか/支援者は、被災地の方言を学ぶべきか（一般論として）

→そう思う。4月にこちらに赴任したときに、市民課の同僚から気仙沼方言についての本を借りた。（気仙沼市・支援者・30代・男性 佐賀県鳥栖市から）

→今後どこかに同様のことで派遣される場合、支援者はその土地のことばを学んでから行った方がよい。（本吉郡南三陸町・支援者・40代・男性 宮城県仙台市から 岩手県釜石市出身）

#### ◎方言に関する取り組みの評価について

※方言パンフレットは必要か/今後、被災地で必要か/今後、他地域で必要か

→人によるのではないかと。私は興味がある。だから、パンフレットがあると、被災地の方言を知るのに、とっかかりができて、有用だと思う。（気仙沼市・支援者・20代・男性 千葉県八千代市から）

→地元の人たちにとっても、若い人たちがこのパンフレットのような方言を使うとは思えないので、こういうパンフレットで方言を後世に残せばよいと思う。（気仙沼市・支援者・20代・男性 千葉県八千代市から）

→役に立つと思う。被災地に来た人がまず方言に慣れる必要がある。その際、このようなパンフレットがあれば、その手掛かりになるだろう。ただ、方言がわからなくとも、わからないなりに会話は進むものだと思う。パンフレットも、実用的なものというよりも、地元の人と支援者の会話の手掛かりとしての意味が大きいと思う。地元の人と支援者との会話のキャッチボールの手掛かりとして利用することができると思う。（気仙沼市・支援者・30代・男性 佐賀県鳥栖市から）

→使いこなせるような、携帯できる方言集であってほしい。単語レベルなら聞き返せるが、文章全体がわからないことがある。（本吉郡南三陸町・支援者・40代・男性 宮城県仙台市から 岩手県釜石市出身）

#### ◎被災地方言による方言エールやスローガンは被災地の方の力になると思うか

※共通語による方言エールやスローガンについてはどうか/支援者の方言による方言エールやスローガンについてはどうか

→やはり方言で作るのがよい。地元愛が表現できる。自分もできれば気仙沼の方言で作りたい。（気仙沼市・支援者・30代・男性 佐賀県鳥栖市から）

→方言によるエールは共通語と比べ、さらに励みになるといった効果があるわけではない。（本吉郡南三陸町・支援者・40代・男性 宮城県仙台市から 岩手県釜石市出身）

#### ◎方言への評価について

※方言保存、継承についてや、被災地方言への好悪/被災地の文化の保護は重要か/

- 被災地の文化として、方言は重要か/被災地の文化として、方言は重要か
- 被災地の文化の保護は重要だと思う。(本吉郡南三陸町・支援者・40代・男性 宮城県仙台市から 岩手県釜石市出身)
- 残しておけばよいと思う。継承していくことについては、今までは生活の中で自然にそうなってきた。しかし、それでは、今後は残らないであろう。私は残す努力をすべきではないかと思う。ただし、それは、実際に方言を使う地元の人たちと相談しながら進めなければならない。(気仙沼市・支援者・20代・男性 千葉県八千代市から)
- どちらとも言えない。方言は変化していくものなので、保存する必要はないのではないかとも思う。変化する姿をそのまま受け止めればよいと思う。これから町が復興・発展すると、他の地域からの人々も住むことになり、各地の方言が入り混じる。そこで新たな気仙沼の方言ができる。気仙沼の伝統的な方言がそれによって新しい方言になるのは許容すべきである。(気仙沼市・支援者・30代・男性 佐賀県鳥栖市から)
- 方言は時代によって変わっていき、残そうと思って残るものではない。残そうとすることには違和感がある。こういう言葉を使っていた、という記録を継承することはよいと思う。あとは次の世代の判断だろう。(本吉郡南三陸町・支援者・40代・男性 宮城県仙台市から 岩手県釜石市出身)

◎被災地の方言は好きか、愛着を感じるか

※支援者自身の方言は好きか、愛着を感じるか

- 南三陸の方言は出身地のそれと近く、懐かしい感じがして、好きだ。(本吉郡南三陸町・支援者・40代・男性 宮城県仙台市から 岩手県釜石市出身)

## 2. 3. 2. 自治体職員

◎方言・地域文化復興への取組み

※自治体の方言復興等への取組み状況、計画等/被災・避難地域の地域文化やお祭りを復興させたり、文化財を保護したりという取組みが盛んだが、こうした取組みの計画等はあるか/担当部署、組織、人員確保、外部団体(大学、学会、NPOなど)との協力関係などはどのようにになっているか

- 気仙沼市教育委員会としてすでに取り組んでいる。文化財レスキュー事業：文化庁、県教育委員会と連携。対象は古文書や民俗資料で、古民家や資料館などの被災資料の保全にあたっている。NPOへの支援事業として郷土芸能(太鼓や装束)の保全。この作業を通して、コミュニティーの団結力を高め、地域再生に貢献することが目的。高台移転に伴う発掘調査も行っている。(気仙沼市・自治体職員・30代・男性 地元出身)
- すでに取り組んでいる。伝統芸能で無形文化財に指定されているものや、まだ指定されていない物も含めてNPOの支援などを受けながら取り組みを始めている。町を中心に大学、博物館などとの協力体制がある。(本吉郡南三陸町・自治体職員・60代・男

性 地元出身)

→すでに取り組んでいる。自治体は衣食住産業復興が優先。文化財関係は後回し。

大きな問題は市民会館、文化センターなどの博物館的要素を持っていた施設の再建めどが無いこと。民間レベルではさまざまな支援有り。県の文化財保護課を中心として大学などが参加する文化財レスキューがはいった。(石巻市・自治体職員・60代・男性 地元出身)

→岩沼市は保護すべき被災した文化財はあまりない。無形のものもほとんどなく、有形のものは流されてしまった。行政では寺社、墓地に手が出せない。集落の移転に寺社は含まれない。移住した檀家は遠隔地になってしまう寺の支援をしにくい。(岩沼市・自治体職員・30代・男性 神奈川県出身)

→町の観光協会が主体となり、昭和60年ごろから、大漁祈願と慰霊を主目的とし、踊り、山車の運行、花火打ち上げからなる「亘理ふるさと夏まつり」を荒浜地区で実施していた。もともと荒浜で実施していた夏祭りに、亘理地区でも実施していたまつりを合流させた格好である。震災後はまつりが中断されている。これまでも別に鎮魂の花火を正月に上げていて、それは震災後も鎮魂の意味で実施したが、2万人規模のまつりは、津波等からの避難場所の確保ができない限り再開は難しい。町なかに場所を変えようとしても、交通規制をする必要があり、これまた難しい。

神社のまつり(神輿渡御が主)も中断している。神輿は復興支援で直してもらったので、氏子でもある荒浜の住民が多く入っている仮設住宅を練り歩きたいという神主の希望がある。(亘理郡亘理町・自治体職員・50代・男性 地元出身)

#### ◎ふるさととのつながりについて

※新聞報道によると、県外避難者からは、慣れない土地でのストレスの多い生活の中「ふるさととのつながり」を求める声も多く聞かれるようだが、こうした声についてどのような取組みをしているか/「方言による被災者の心的な支援」の計画はあるか我々が協力する余地はあるか

→検討されていない。計画もない。どういったことをしたらよいかわからない。(気仙沼市・自治体職員・30代・男性 地元出身)

→必要性はあるが具体化していない。その一方で、一部の地域では地元とのつながりを回復する取り組みをすでにはじめているというような話も聞いたことがあるが、具体的なことはわからない。(本吉郡南三陸町・自治体職員・60代・男性 地元出身)

→石巻では聞いたことがない。せいぜい仮設住宅や各自宅訪問をする程度。県外避難者に対しては手が回らない。南三陸ではやっているようだ。おらほのラジオ体操石巻バージョンを出した。いい支援になっているようである。500円で販売し内200円を義援金として分配している。協力余地についてはすぐに思いつかない。(石巻市・自治体職員・60代・男性 地元出身)

- 県外に避難した住民はほとんどいないようである。近隣の市町が大半である。そのため、避難先でトラブルがあったという話はきかない。市として特にふるさととのつながりを残すという支援もしていない。(岩沼市・自治体職員・30代・男性 神奈川県出身)
- 町外へ避難・移住した(元)住民について。住民票を移していない人、また移していても希望する人に対しては、催し物等の情報提供として町の広報誌を送っている。町外に家を建てている人もあり、元の通りにはならないであろう。(亶理郡亶理町・自治体職員・50代・男性 地元出身)

◎ふるさととのつながりを考える上で「方言」は大変重要なものだという考えについてどう思うか

- そう思う。方言は生活していくうえで基本となるものであり、大切にしていけるべきだ。(気仙沼市・自治体職員・30代・男性 地元出身)
- そう思う。言葉はその土地の生活に裏付けられたものであり、簡単には切り離せない。テレビでもズーズー弁を聞くとほっとする。思いを伝えるには方言が大切だと思う。たとえわからなくとも。ズーズー弁は気持ちを伝えると思う。(気仙沼市・自治体職員・50代・男性 地元出身)
- 必要だ(本吉郡南三陸町・自治体職員・60代・男性 地元出身)
- 必要だ。コミュニケーションには普段の言葉が一番良い。仲間同士とのリラックスした会話ができる。(石巻市・自治体職員・60代・男性 地元出身)
- 若い人は多くの場合標準語を使うので、方言を共有すること自体が地域の絆とはならないと思う。世代を超えてコミュニケーションをとること自体が重要である。そのときに結果として方言が出てくることはある。震災前と比べると、家族、親戚との会話は増えた。安否確認から始まり、集まりをもつことが増えた。以前は法事や結婚式くらいだった。その際、特に方言を話す割合が増えたわけではないが、地元の年配の人と話す割合が増え、結果として方言を話す量は増えた。(亶理郡亶理町・自治体職員・50代・男性 地元出身)

◎今回の災害でこちらの自治体の方言が失われることのないよう、文化庁は保存、継承への取組みを支援したいと考えているが、こうした取組みについてはどのように感じるか

- 必要なのではないか。(気仙沼市・自治体職員・30代・男性 地元出身)
- 気仙沼方言の成立には、歴史的に中央との結びつきがあったようだ。地域の文化の歴史を知るためには、方言の保存・継承への取組みは重要だ。(気仙沼市・自治体職員・50代・男性 地元出身)
- ことばが失われていくことに歯がゆさは感じるが、ことばはこうやって盛衰を繰り返すのだから、特に何かをする必要はない。(本吉郡南三陸町・自治体職員・60代・男性 地

元出身)

→必要なことだ。やるなら早くやってほしい。石巻は言語資料が多く残っているの、その点では助かっている。(石巻市・自治体職員・60代・男性 地元出身)

→方言の記録はぜひすべきと思う。常に変化にさらされているので、その都度記録することは大事である。(岩沼市・自治体職員・30代・男性 神奈川県出身)

→テレビ、ラジオの番組でも方言が聞かれたり、紹介されていたりする。方言がなくなればよいとは思わないが、方言を理解する人が少なくなれば言葉は変わっていく。保存しようとか、なくさないようにしようとかしても無駄ではないか。(今の方言を)保存するかどうかは別問題。方言は聞いてわかればそれでよいと思う。なくなってほしくはないが、次の世代に無理に覚えてもらおうとは思わない。(亶理郡亶理町・自治体職員・50代・男性 地元出身)

◎こちらの自治体の方言は好きか。愛着を感じるか。

→好きだ。愛着がある。あえて直そうとは思わない。(気仙沼市・自治体職員・30代・男性 地元出身)

→若い時は恥ずかしく思ったが、今はそうではない。普通に話す。愛着もある。いろいろな方言を聞くと、気仙沼の方言はそんなにひどい方言ではない。意外とスマートな方言である。(気仙沼市・自治体職員・50代・男性 地元出身)

→当然愛着はあるが、好きとか嫌いとかそういう感情で考えたことはない。(本吉郡南三陸町・自治体職員・60代・男性 地元出身)

→好き。(石巻市・自治体職員・60代・男性 地元出身)

◎方言の問題・効用について

※支援者等との間の方言摩擦、方言使用の効用/震災後、支援者と被災された方々の間で、方言が通じなくて困ったというような事例も報告されているが、こちらの自治体ではこうした事例を聞いたことはなかったか

→市役所の窓口で地元の人と対応した支援職員は困っていた。発音や地名がわからないということで。たとえば、キとチ、シとスなど。「鹿折」を「ススオリ」「スソリ」と発音する。私自身は、特に困ったということはないが、それでも、支援の職員との関係で、より理解しあえるようにお互いの方言についての情報を交換し合っている。相手に対して、自分の言葉に気を使ってしまうこともある。本当にわかっているのかな？という感じで。(気仙沼市・自治体職員・30代・男性 地元出身)

→東京から来られた支援者の方で「それどういう言葉なの？」と聞いている人がいた。震災後ではないが、うちの嫁さんは東京出身。おばあちゃんの言葉がわからない。東京や鹿児島から来たお嫁さんが「ゴミナケ テコー」と言われてとまどったという話を聞く。(気仙沼市・自治体職員・50代・男性 地元出身)

- ある。特に役所や避難所などの電話口で通じないという話を聞いた。県外からの支援者などが戸惑っていた。(本吉郡南三陸町・自治体職員・60代・男性 地元出身)
- 言葉の壁あり。震災直後に鹿児島や沖縄から広く医療支援で来たが、地元の病院スタッフが通訳代わりについてまわっていた。(石巻市・自治体職員・60代・男性 地元出身)
- 自分は異聞は関東出身であるが、岩沼の方言は特に違和感はない。方言により細かなニュアンスが通じる、と感ずることがある。支援者と住民の間でトラブルにあったという話は聞かない。わからない方言はたまにあるが、業務で困ることはない。(岩沼市・自治体職員・30代・男性 神奈川県出身)
- 他地域に移住した住民が、その土地で方言に関して嫌な思いをしたとは聞いていない。地元の方言をよそで使うのを恥ずかしいと思うことはあるが、窓口業務などで地元のお年寄りと話ときは使った方が、業務はスムーズに行く。震災後、支援者との間で方言が通じずに困ったということはない。被害が少なかったこともあり、支援者も多くを必要とせず、来た支援者は近隣地域からの方が多かったことによる。(亶理郡亶理町・自治体職員・50代・男性 地元出身)

◎支援者向けに地域の方言を解説したパンフレットが作られているが、こうした取り組みは必要か

- こうした取り組みは必要だ。役に立ったと思う。また、地元の人にも勉強になり、自分たちの方言を再確認できた。職員も持って行って「話のネタ」として利用した。(気仙沼市・自治体職員・30代・男性 地元出身)
- 東京から来られた支援者の方で「それどういう言葉なの？」と聞いている人がいたことからすれば、支援者と地元の人との交流のひとつのきっかけになるのではないか。(気仙沼市・自治体職員・50代・男性 地元出身)
- 必要だ。(本吉郡南三陸町・自治体職員・60代・男性 地元出身)
- あるにこしたことはない。分野ごとに必要なものは異なってくる。分野別、特に医療関係の言葉を真っ先に作るべきだ。電話対応に関するものなども地域性があり必要か。(石巻市・自治体職員・60代・男性 地元出身)
- 方言集はなくても概ね話は通じる。住民が方言に対応する別の語をさがせたであろう。姉妹都市である高知県南国市からの支援者はメモを取っていたような記憶がある。(岩沼市・自治体職員・30代・男性 神奈川県出身)
- 「方言集」はなくても困らない。医療では地元の救急隊が間に入るし、役所も標準語を使うので。(亶理郡亶理町・自治体職員・50代・男性 地元出身)

◎震災後、各地の方言を使ったかけ声が聞かれたが、こうした方言によるかけ声は地域の方々の力になったか。

※「がんばろう東北」のように共通語で表現されたものにくらべてどうか。

→親しみが持てる。応援してくれているんだなあ！と思う。県外ナンバーの車に方言スローガンが貼ってあるのを見るとそう思う。共通語のスローガンより親しみが持てる。(気仙沼市・自治体職員・30代・男性 地元出身)

→力になっている。地元の言葉で書いてあると励まされる。「がんばろう」より「がんばっぺ」の方が、手を組んで一緒にやろうという感じが出ている。さらに「がんばっぺし」の方が相手を思いやるやさしい感じだ。よその人が気仙沼の方言を使ってスローガンを作ってくれるのはありがたい。共通語より励まされる感じがする。(気仙沼市・自治体職員・50代・男性 地元出身)

→特別違いは感じなかった。(本吉郡南三陸町・自治体職員・60代・男性 地元出身)

→親しみがもてる。励まされた。「～がんばろう。」と言われてもよそよそしい感じがする。関係のないよその人間が頑張る気がする。(石巻市・自治体職員・60代・男性 地元出身)

→方言によるエールに対し、住民の特段の反応はなかったようだ。それに関する話は聞かない。(岩沼市・自治体職員・30代・男性 神奈川県出身)

→東北方言によるスローガンには抵抗がない。見て悪いイメージはない。当初は不安の方が大きく、あまり気にもしなかったが、ある程度落ち着いたところで、励みになった。方言によるスローガンは自衛隊が最初ではないか。印象的だった。(亶理郡亶理町・自治体職員・50代・男性 地元出身)

◎方言によるかけ声はについて、「がんばってや東北」とか「ちばりよ一福島」など他地域の方言を使ったかけ声についてはどうか

→応援されている感じがする。先方がこちらを気にしてくれている気持ちは伝わる。(気仙沼市・自治体職員・30代・男性 地元出身)

→地域、地域から励ましてくれているという思いが伝わる。(気仙沼市・自治体職員・50代・男性 地元出身)

→親しみがもてる。より励まされる気がする。好感がもて、さまざまな地域の応援を感じることができる。標準語に対するコンプレックスも一部ではあるので、他地域からお国言葉で応援されると嬉しい。(石巻市・自治体職員・60代・男性 地元出身)

→他地域の方言によるものについては、支援、全国からの声であり、否定はしない。受け入れてもよいと思う。向こうの人も自分たちのことを見ていてくれているんだなという安心感はある。(亶理郡亶理町・自治体職員・50代・男性 地元出身)

◎その他、自由回答

※こちらの自治体の方言に関する取組み/方言にまつわるエピソード

→次世代への方言の継承について。昔は生活の中に方言があった。子供とじいちゃん、ばあちゃんが一緒に暮らしていた。今はそうではない。「教える」というやり方ではだめだ



ろう。地域の伝統行事の中で伝えていくことが必要でないか。たとえば、複合施設を作るときに、老人施設と保育施設を併設するとか。老人の精神ケアにもなる。(気仙沼市・自治体職員・50代・男性 地元出身)

→東北の人、特に南三陸の人たちは自分たちの話す方言を皮肉的に話題にする。都会に行ってもズーズー弁などの方言要素がつつい出てしまったり、満員電車に乗ってつい「オメダズ オダズナヨー」などつぶやいたりしてしまった。(本吉郡南三陸町・自治体職員・60代・男性 地元出身)

→復興推進事業課が高齢者向けの住民説明会をおこなったところ、外からきた役人が地元の人の意見をじゅうぶんに理解できなかつたり、反対に地元の人たちも役人の話を理解できなかつたりということがあった。(本吉郡南三陸町・自治体職員・60代・男性 地元出身)

→関西方面からきた人たちの話し方がどうしても軽く聞こえてしまい嫌だった。(本吉郡南三陸町・自治体職員・60代・男性 地元出身)

→役場内は全国から派遣された職員が集まるため、言葉の面での摩擦は多かった。(本吉郡南三陸町・自治体職員・60代・男性 地元出身)

→石巻市、仙台藩というのは昔から方言意識が高く、古い語彙集などが多く残っている。昭和7年に方言語彙を網羅したものも作られた。

おらほのラジオ体操に真っ先に取り組んだのもその流れがあるだろう。(石巻市・自治体職員・60代・男性 地元出身)

### 2. 3. 3. 被災者

#### ◎方言使用の状況について

※震災・避難による方言使用量の変化/震災前とくらべて、家族、顔見知りの親戚や隣の人と方言を使って話す機会は増減したか。

→家族とは変わらない。親戚や隣人とは増えた(気仙沼市・被災者・70代・女性 地元出身)

→震災前と比べ、方言と話すことは特に増えたわけではない。もともと孫たちとは標準語、親戚や地元の人とは方言で話をしてきた。(亶理郡山元町・被災者・70代・男性 地元出身)

#### ◎方言使用の状況について

※震災・避難による方言使用量の変化/震災前とくらべて、顔見知りではない方と話す機会はどうか/その場合、方言と共通語のどちらで話すことが多いか

→共通語。だが、学生ボランティアさんにはこちらの言葉をたくさん教えてあげた。オコワ(赤飯)とか、ズーズー弁を。ボランティアのみなさんも、地方の言葉はいいですね、と言ってくれる。方言だと気持ちが近づく感じがする。相手の地域の言葉や文化のこと

を聞いて情報交換をしていると、自然と情が移ったりする。(気仙沼市・被災者・70代・女性 地元出身)

- 震災前と比べ、知らない人と話す機会は増えた。復興組合でがれき拾いをしている。知らない人でも、地元の人とは方言を使う。よそから来た人とは標準語を使う。方言を使うと打ち解けた感じがする。方言を使って通じなかったら標準語を使った。嫌な思いをしたことはない。(亶理郡山元町・被災者・70代・男性 地元出身)

◎支援者等との間の方言摩擦、方言使用の効用

※震災後、言葉や方言のことでなにか困ったり嫌な思いをしたりといったことはなかったか。

- 私はボランティアの人と接する経験がなかった。ただ、これまでの経験では、私の知っている静岡の人に、「ダカラー」の使い方がわからないと言われた。気仙沼では「ダカラー」を相づちのように使うが、それが、「ダカラー」のあと、話の続きがあると思われた。(気仙沼市・被災者・50代・女性 地元出身)
- なかった。(気仙沼市・被災者・70代・女性 地元出身)

◎支援者向けに地域の方言を解説したパンフレットも作られているが、こうした取組みは必要か。

- 支援で来た人は気仙沼の方言がわからないので、パンフレットは必要である。その際、気仙沼の内部でも、唐桑・本吉など、地域によって方言が違うので、その点への配慮が必要だ。(気仙沼市・被災者・50代・女性 地元出身)
- 必要だ。助かったし、役に立った。支援者との会話の話題作りになった。(気仙沼市・被災者・70代・女性 地元出身)
- 支援者向けの方言集はあるとよい。おぼえることにより打ち解けると思う。(亶理郡山元町・被災者・70代・男性 地元出身)

◎震災後、各地の方言を使ったかけ声が聞かれたが、こうした方言によるかけ声は被災者にとって力になったか。

※「がんばろう東北」のように共通語で表現されたものにくらべてどうか

- 「がんばろう」より「がんばっぺ」の方をよく見かけた。親しみがあり、地域の人と一緒に復興に向かっていく感じがする。(気仙沼市・被災者・20代・女性 地元出身)
- 年を取った人はそう感じるのではないか。共通語に比べて、方言の方が多少は励まされる感じだ。「気仙沼なんだな」と思う。(気仙沼市・被災者・50代・女性 地元出身)
- 力になった。踊りの先生である花柳寿寿菊(はなやぎすずぎく)先生(気仙沼出身で東京の本部にいる。宮城三陸大使を務めている)が、気仙沼小唄を振付されたときに、踊りの合間に「がんばっぺ」という文句を入れた。東京の目黒のサンマ祭で披露したとこ

ろ、東京の人たちも、「がんばっぺ」一緒に言ってくれたのはうれしかった。(方言の方が) 親しみが持てる。より励まされる気がする。馬鹿にされている気はしない。(気仙沼市・被災者・70代・女性 地元出身)

→スローガンでは活気づいた。方言でも共通語でも同じように励まされた。(亶理郡山元町・被災者・70代・男性 地元出身)

◎震災後、各地の方言を使ったかけ声が聞かれたが、こうした方言によるかけ声は被災者にとって力になったか。

※「がんばってや東北」とか「ちばりよ一福島」など他地域の方言を使ったかけ声についてはどうか

→親しみがもてる。発掘作業に愛媛の学校の先生が応援に来られていて、Tシャツに「元気で帰って来いよ」といった意味の方言を描いていた。(気仙沼市・被災者・70代・女性 地元出身)

→関西や九州の方言によるものではあまりそのような気にならない。(亶理郡山元町・被災者・70代・男性 地元出身)

◎被災・避難地域の地域文化やお祭りを復興させたり、文化財を保護したりという取り組みも盛んだが、こうした取り組みについてはどう思うか

→自分も20年くらい古文書の保存に関わっている。愛着を手先に感じる。昔の女性の姿などが古文書から伝わってくる。(気仙沼市・被災者・70代・女性 地元出身)

→自分の住む地域でも神社が流された。援助により神楽が復活しそうである。まつりの復興は地域の団結心がなくてはならず、その団結心を呼び起こすのによい。まつりでもなんでも、住民が集まることは大事である。(亶理郡山元町・被災者・70代・男性 地元出身)

◎ふるさととのつながりを考える上で「方言」は大変重要なものだという考えについてどう思うか。

→私は祖父母と一緒に暮らしている。わからない言葉があると尋ねるのだが、教えてくれない。通じないと「あーあ」という感じになる。なんでここに住んでいるのに方言がわからないのか、残念である。方言はその人の出身がわかってよい。(気仙沼市・被災者・20代・女性 地元出身)

→方言を聞くとなつかしい。特に、大学へ行くとか就職するとかして外に出た人はそう感じる。帰って来たんだと思う。イズイなど。菅原孝雄さんの『けせんぬま方言アラカルト』(調査者注：菅原孝雄(2006)『けせんぬま方言アラカルト 増補改訂版』三陸新報社)を楽しんだ。方言はふるさとの文化として大切だと思う。(気仙沼市・被災者・50代・女性 地元出身)

→必要だと思う。テレビの有名人で地方の人が方言を使うとほっとする。もっと使ってほしい。方言は残した方がよい。方言はふるさとの財産だ。(気仙沼市・被災者・70代・女性 地元出身)

◎今回の災害でこちらの自治体の方言が失われることのないよう、国の機関である文化庁が保存、継承への取組みを支援したいと考えているが、こうした取組みについてはどう思うか

→方言は感覚的なものなので、そこをどう伝えていくか考えなければならない。(気仙沼市・被災者・20代・女性 地元出身)

→意味があると思う。方言がわかる人がいるうちにやるべきだ。(気仙沼市・被災者・50代・女性 地元出身)

→必要だ。いいことだ。どんどんやってほしい。そうでないと、いつか方言が消えてしまうのではないかと心配だ。(気仙沼市・被災者・70代・女性 地元出身)

→方言の記録はよいことである。(亶理郡山元町・被災者・70代・男性 地元出身)

◎こちらの自治体の方言は好きか。愛着を感じるか。

→わからない言葉は多いが、なくなると寂しい。(気仙沼市・被災者・20代・女性 地元出身)

→そういう観点で考えたことがないが、あるといえばある。なくなるのは寂しい。(気仙沼市・被災者・50代・女性 地元出身)

→好きだ。しょっちゅう使っている。近所のおばあちゃんたちに、女として生き方を方言で教えてもらった。今、子供たちの世代に、同じことをしている。方言は自分でも楽しむことができるものだ。(気仙沼市・被災者・70代・女性 地元出身)

→好きだし、愛着もある。(亶理郡山元町・被災者・70代・男性 地元出身)

◎自分の子や孫に、こちらの自治体の方言を受け継いでいてほしいと思うか。

→受け継いでほしいと思う。(気仙沼市・被災者・20代・女性 地元出身)

→受け継いでほしいと思う。中学校の教室での方言の話だが、私の子供の教室で、先生が「オゴゴ、わかるか？」と質問したところ、わかったのは2人だけだった。(気仙沼市・被災者・50代・女性 地元出身)

→そう思う。歳を重ねた方が方言の良さに気付くものだ。年配者も方言だと喜ぶ。(気仙沼市・被災者・70代・女性 地元出身)

→子や孫にも方言も受け継いでほしい。方言を子どもたちに教えたい。それにより打ち解けて話すようになり家庭円満になる。そもそも会話が必要である。(亶理郡山元町・被災者・70代・男性 地元出身)

## 2. 4. まとめと提言

2.3 で列挙した回答をまとめると次のようになる。

### <支援者>

- ・関東以西からの支援者からは、単語、特に地名の聞き取りに苦労したことがあるという回答があった。被災者との間に深刻な方言摩擦やトラブルがあったという回答はなかったものの、方言が理解できずに困ったという問題は起こっていた。
- ・聞き取れない場合、どうしても必要な場合以外はその場で聞き返して良いものか苦慮している。
- ・ある程度、被災地の方言を学んでから現地に行けると良い。実用以外にも被災者とコミュニケーションを取る際の話源として使える。そういった意味で、方言紹介のパンフレット作成については肯定的な意見が多かった。現場で使いやすい形式のものがよいという要望がある。

### <自治体職員>

- ・地域それ自体、あるいは地域の文化や祭りの復興の取り組みが各地で始まっている。その過程では地域住民の団結のためにコミュニケーションが必要で、その媒介手段として方言が一定の役割を果たしている。
- ・今回の調査で得られた回答には、避難先で方言による摩擦やトラブルの話聞いたというものは無い。ただ、住民の避難先の多くが近隣であるという自治体の職員からの回答である。遠隔地への避難者については断言できない。

### <被災者>

- ・震災後、親戚や地元の住民と話す機会が増え、結果として方言を使うことが多くなった。
- ・地元の方言による「がんばっぺ宮城」等のスローガンは、共通語によるものに比べ、実感がわくとのことで好意的である。関西、九州等の方言によるものも、その地域の人が見守ってくれていると感じられる点で同様である。
- ・方言はふるさとの文化であり、子孫に伝えたいという回答が多い。

地域や地域の伝統文化の復興のためには、住民を含む関係者の間に連帯感が欠かせないであろうし、逆に言えば連帯感がうまれることにより復興は加速すると思われる。コミュニケーション、言い換えれば「絆」のための媒介手段として、言語、すなわち方言が一定の役割を果たしていることが分かった。それゆえ、方言を子孫に伝える、記録しておくことにも肯定的な回答が得られた。

一方、支援者、特に遠方からの支援者にとっては、被災地の方言はときとして分かりに

くい部分があるものの、方言そのものを題材にして被災者とコミュニケーションを取るといふ側面があることから、もし時間的余裕があれば、事前被災地の方言を学んでおきたい、という回答があった。それゆえ、方言パンフレット、会話集には一定の需要があることも分かった。

今後、これらの実状を踏まえ、関係者の要望に応じるべく、方言研究に携わる者が、コミュニケーションにおける媒介手段としての方言に関わる諸問題に協力していければと思う。

(第2章 武田拓執筆)